

日本、ベトナム、インドネシアで農業の後継者育成

有機農業で自立、心豊かな暮らし



野菜の収穫をする塾生



出荷の伝表を作る塾生たち



塾生による会員拡大のための即売会

帰農志塾の卒業生約100人が全国各地で就農

私が有機農業を始めたのが1976年、すでに36年が経過した。その前年までの2年間、ベトナムで農業技術協力の仕事にかかわっていたが、ベトナムの解放にぶつかり帰国を余儀なくされた。帰国後の日本の野菜は何を食べてもあまりおいしくなく、自分の作っていた野菜とは比べ物にならなかった。そんな訳で、自分で作ることにしたが、土地、家もなく、資金もなかった。幸い50aの荒地と雨漏りのする旧医院の病棟を借りることができ、農業をスタートした。

もう一つの就農の動機は農家の後継者不足である。農家の後継者は減少し続け、新規学卒就農者は全国で年間3000人を割った。当時の市町村が全国で3200、要するに1年に1人以下しか市町村に後継者は生まれていなかったのである。このままの状況が続くと農村はどうなるであろうか。日本の田畑や日本人の食糧は日本でまかなえるのであろうか。後継者不足と叫ばれて久しいが、行政も教育機関も何の手だてもなく、農家の後継者という視点しかなかった。農業の農村の後継者、担い手の育成が大切であると痛感した。

そんな訳で自分一人が新規就農するのではなく、農業の大切さや魅力等を若者に教え伝える場所として、農場を「帰農志塾」と命名し、数人の若者を受け入れ始めた。現在まで100人近い卒業生が全国に散らばり就農し、村社会にとけこみながら有意義な生活と村人たちとの協同の和を広げつつあり、新規就農が若者の生き方、暮らし方の一つの選択肢になるほどになっている。

先輩が新入塾生に教えながら自らも育っていく

塾での「共育」の方法の一部を紹介すると、全員寝食を共にした共同生活で、農業を学びながら自ら圃場を担当し、野菜の配達の責任や、会員との話し合いや拡大、店との交渉など、塾運営のすべてと関わりながら、塾全体の運営を塾生が行っている。数か月前、1年前に入った先輩が新入塾生に教えながら自らも育っていくという方法である。

会員（消費者）との関わり的一端を紹介しよう。帰農志塾の1戸当たりの野菜供給量は、通常の提携の量より相当多い。ピーク時1回大根3本、レタスも2〜3個、ナスやピーマンも20個30個という量を出すこともよくある。それは、会員が従来の食生活の野菜の部分有機に変えるだけでなく、食生活全体を変える必要があると考えたからだ。

このような、日常の会員との関係の中で長年の忌憚ない交流を通じて、会員とは素晴らしい信頼関係が生まれ、有機野菜を食べ続けることが自らの健康だけでなく新規就農者を育てているという意識を持っていただいている。

食事療法に生かされている有機野菜

たくさん届く野菜に苦勞をしている会員もいるが、新規会員からは子供の医療費が減ったという声が聞かれ、古い会員には、癌も含め大きな病気がほとんどない。また3年程前から、難病の人が行く東京の某クリニックを通じ、食事療法、治療食として患者の家庭へ毎週10軒ほど届けている。院長の話では、一般の有機野菜とは大きな差があるということである。これは生育ギリギリの

最低限の肥料しか与えず生産するという基本的な考えの結果である。

もう一つの活動として8年前にインドネシア・スマトラ島に有機農業の教育普及農場を作り、5年間現地で指導し、塾と同様の方法で後継者育成に取り組んできた。今では現地のいくつかのNGOが有機農業の指導や普及を行っている。アジアの多くの農村でも農村は貧しく、都会に出て幸せをつかもうとする若者は多いが、結果として農村生活以上に悲惨な生活をしている人が大部分である。

有機農業は、新規就農者の例のように、裕福ではなくても自立し、豊かな生活を送ることができる。自然と共に生きていくことで、家族や自分と関わる消費者の健康・命・台所をあずかっているという自覚が心の豊かさにつながる。

有機農業は、自然の一員として暮らしていく人間の素晴らしい生き方ではないだろうか。

今も10人の若者に囲まれながら暮らしている。

戸松正プロフィール

1947年大阪に生まれ、学生時代から韓国の陰性ライ病の社会復帰の村建設を手伝う。その後ベトナムで活動後、1976年茨城県で新規就農すると同時に「帰農志塾」設立。1994年農場を栃木県に移す。2003年帰農志塾と並行しながら「アジア農村共に生きる会」を設立、インドネシア・スマトラ島で有機農業教育普及農場を運営。2008年終了し、現在に至る。

帰農志塾★〒3221・0604 栃木県那須烏山市中山1041

TEL & FAX 0287・83・0930

e-mail kinousijyuku@yahoo.co.jp